



# くすい箱

発行

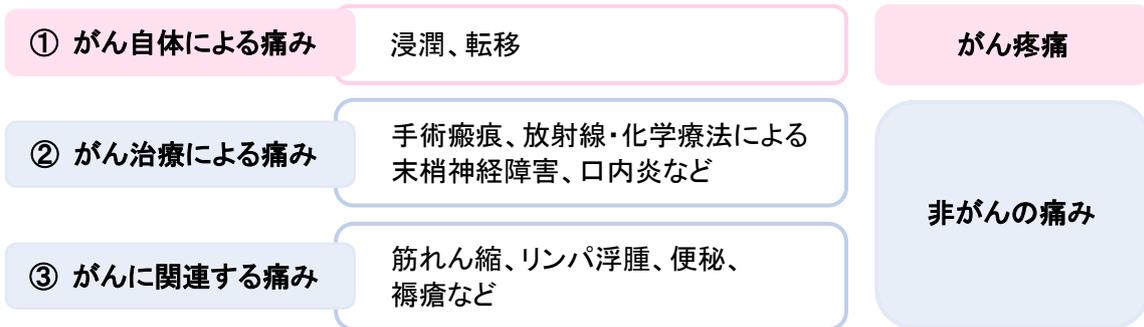
桐生厚生総合病院 薬剤部  
発行責任者 河井 利恵子  
編集担当者 栗原 麻奈美  
矢古宇 由佳

## 第67回目のテーマは“がんの痛みを和らげる薬”についてです。

がんの痛みはよくみられる症状のひとつですが、治療によって和らげることができます。うまく治療に結び付けていくために、がんの痛みにはどのようなものがあるのか、どのような薬があるかなどについてお話していきます。

### がん患者さんの痛みとは

がん患者さんが体験する痛みには ①がん自体による痛み ②がん治療による痛み ③がんに関連する痛みがあり、効きやすい痛み止めや治療方法が痛みの種類ごとに異なります。いつ、どんな時に、どこが、どれくらい痛みがあるかなどによって、感じている痛みにあわせて薬が選択されます。



### 痛みを表す方法

痛みの度合いは感じ方が個人個人で異なるため、どれくらい痛いかを伝える方法として、数字で痛みを表す評価法があります。(NRS)

痛みがない状態を0、想像できる最大の痛みを10として、0～10までの11段階に分けて、現在の痛みを表現します。



### がんの痛みを和らげる薬

がんの痛みを和らげる薬は非オピオイド鎮痛薬、オピオイド鎮痛薬(医療用麻薬)、鎮痛補助薬に分けられます。痛みの強さや痛みの種類によっていくつかの痛み止めを組み合わせる使用することもあります。



## 非オピオイド系鎮痛薬

痛みがまだあまり強くない段階で使用される鎮痛薬には、ロキソプロフェンなどの非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs) とアセトアミノフェンがあります。

## オピオイド鎮痛薬 (医療用麻薬)

オピオイド鎮痛薬には弱オピオイド、強オピオイドの2種類があり、弱オピオイドにはコデイン、トラマドール、強オピオイドにはオキシコドン、モルヒネ、フェンタニル、ヒドロモルフォン、メサドンなどがあります。

薬の種類も飲み薬 (錠剤、粉薬、水剤) の他に貼り薬、坐薬、注射薬などがあり、痛みの強さや患者さんの症状・状態などによって選択していきます。

麻薬と聞くと、中毒や依存の心配などから抵抗がある患者さん多いと思います。ですが、医療用の麻薬は痛みがある方が適切に使用している場合には中毒や依存症になることはありません。痛みがあるときには我慢せずに適切に痛み止めを使用して痛みを緩和していくことが大切です。

## 鎮痛補助薬

オピオイド鎮痛薬や非オピオイド鎮痛薬を使用しても効果が不十分な場合に、神経の痛みに対して抗うつ薬や抗けいれん薬、抗不整脈薬を、むくみや炎症を抑える目的でステロイド剤などを使用することがあります。

## オピオイド鎮痛薬の使い方

1日のなかで12時間以上続く痛み (持続痛) と痛み止めで痛みをコントロールしていても一過性の強い痛み (突出痛) が出現することがあります。

持続痛のコントロールには1日1回または1日2回決まった時間にお薬をきちんと使用する必要があります。決まった時間に使用していても強い痛みが出現する場合には、レスキューと呼ばれるお薬を使用します。レスキューは痛みを感じ始めたら早めに服用することで効果的に使用できます。また、レスキューの回数に応じて、定期的使用するお薬の量を調節することがあるため、1日何回、何時に服用したかを記録していただくことで痛みのコントロールに役立てることができます。

## オピオイド鎮痛薬による副作用

主な副作用として、便秘・吐き気・眠気があります。吐き気や眠気は、オピオイド鎮痛薬を開始したときや増量したときに出現しますが、体がなれてくれば落ち着いてくるといわれています。

吐き気が辛い場合には、吐き気止めを使用することもあります。

便秘はオピオイドを使用している間対策が必要になりますが、現在様々な種類の便秘治療薬があり、状態に合ったお薬を選択し、日々の排便状況に応じてお薬を使用していきます。

**痛みがあるときには我慢せず、副作用についてなど不安や気になることがあるときには遠慮せず、医師、看護師、薬剤師等にご相談ください。**

<<参考資料>> がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン、がん疼痛緩和の薬がわかる本



**今回は、“お薬の管理方法について”をテーマに2023年6月発行予定です。**